

メディア研究の視座

- 『ウルトラ』シリーズを題材として -

佐藤 匡*・神谷 和宏**

Perspective of Media Studies
- ULTRA Series as a subject -

SATOU Masashi*・KAMIYA Kazuhiro

キーワード：ウルトラマン，怪獣，メディア，表象

Key Words: ULTRAMAN, Monster, Media, Symbol

はじめに

私（佐藤）の専門分野は、最も大きな分類でいうと社会科学である¹。社会科学は自然科学とは異なり真実は1つとは限らない。ゆえに、自然科学が「～である」と結論付けるのに対し、社会科学においては「～であるべきだ」と価値判断を伴うことになる。

これだとあまりにも専門分野の範囲が大きくなりすぎてしまうので、もう少し焦点を絞ると、私の専門分野は法学であるということになる。とはいっても法学にもいろいろな分野がある。法学は大きく分けると実際の問題への適用を前提として実定法に関する研究を行う実定法学と法に関する基礎的研究を行う基礎法学に分かれる²が、私の専門分野は、実定法学に該当する。

これでも実はかなり広範囲になってしまう。そこで、もう少し分類してみよう。実定法学はその対象法領域によって、憲法や行政法等の公法学、民法や民事訴訟法等の民事法学、刑法や刑事訴訟法等の刑事法学、そして国際法学に大きく分類されるが、私の専門分野は公法学である。ゆえに、現在の講義担当科目も「憲法学」³、「統治機構論」⁴、「行政法」⁵となっている。

さらに細かく絞り込むと、公法学の中でも主たる専門分野は憲法学ということになる。ゆえに、「ご専門は？」との問いには、専ら「憲法学です」と答えるようにしている。

しかし、実は憲法学の守備範囲は非常に広い。であるから、同じく憲法学を専門としている者の間では「ご専門は？」と問われたら、「第21条関係です」と答えることになる。第21条関係とは、表現の自由（日本国憲法第21条第1項）や通信の秘密（同法同条第2項後段）に関する分野を意味する。多くの場合は「表現の自由です」と答えるのであろうが、私の場合は「第21条関係です」と答えざるを得ない。それは、研究対象が、表現の自由と通信の秘密の複合領域だからである⁶。しかし、最近は、「第21条関係です」とは答えずに、「プライバシー関係です」と答えることも多い。プライバシーは第21条関係かというそうではない。では何条関係かという明確な条文はない。というのもプライバシーという権利は新しい権利であるので日本国憲法制定時にはまだ人権として確立していないからである。では、根拠条文がないのかといえ、ないことはない。第13条の幸福追

* 鳥取大学地域学部地域政策学科

** 北海道苫小牧市立和光中学校

求権の1つとして包括的に保証される。では、「第13条関係です」となぜ答えないのかといえば、答えられないと答えるしかない。というのも包括的に新しい人権を保障するため、「第13条関係です」と答えてしまうと守備範囲はかなり広範になってしまう⁷からである。

ある人のプライバシーの権利は、他者の表現の自由によって侵害される。ゆえに、攻撃する側の研究をしていくと、守る側に研究も必要となり、現在は、守る側のプライバシー権利の方に重点を置いて研究をしている。法学というものは1つの事象を多面的に見る目が必要となる学問である。ある事件1つとってみても、被害者の捉え方、加害者の捉え方、目撃者の捉え方、と様々な捉え方があるわけである。ペットボトルにおいても、前から見れば変な形の六角形であるが、下から見れば円である。同じ物体でも見る角度が違えば見える形も違う。同じ事件でも立場が異なれば捉え方が異なるのは自明の理である。ゆえに、この異なる捉え方があるということを前提に問題解決を図ったり、問題が起こることを予防したりすることが法の役割である。よって、攻守の攻の部分だけ研究しても、それは不十分であって、守の部分も同程度研究して初めて意味を成すのである。つまり、表現の自由とプライバシーは、ある意味車の両輪のような関係であるといえる。

表現の自由とプライバシー、この攻守2者のキーワードは何か。キーワードは情報である。この情報を我々はどのように扱っているのだろうか。表現の自由の場合は、自分の意見という情報を他者に発信する⁸。つまり、発信するための情報である⁹。しかし、情報は発信されるばかりではない。管理されるべき情報というものもある¹⁰。例えば、個人情報¹¹や動物の個体情報¹²等である。またこれらの管理される情報はプライバシーとも密接な関係がある¹³。ゆえに、このような個人情報や動物の個体識別情報も研究対象となる。このような情報は地域生活においては不可欠な要素¹⁴となることから地域学的にも重要な分野であると解しているところである。

このように情報に関する権利が私の主な専門領域となるが、情報権なる概念は、まだ市民権を得ていないため、丁寧に述べると先述したように「第21条関係です」や「プライバシー関係です」ということとなる。実は厄介なことに、この情報に関する権利は、憲法の範囲のみの理解では十分に研究することはできない。侵害されれば、財産上の問題も含むことになるため民事法（特に民法）の知識が不可欠となるし、犯罪にかかわるような場合には刑事法（特に刑法）の知識が不可欠となる。結果として、「情報に関わる権利及び法制度」というのが私の専門ということになる。ゆえに、憲法学（もちろん行政法学も含む）のみならず民法学や刑法学も情報に関する限りは専門ということとなる。

さて、ここまで長々と私の専門分野について述べてきたが、もちろん今さら自己紹介をすることが目的ではない。本稿でこれから述べることについて、途中で著者の専門は何だったかと追及される前に予め解答を用意するのが目的である。民法の財産法分野に受領遅滞（民法第413条）というものがある。この受領遅滞とは、債務の履行において、債権者の受領等の協力が必要な場合、債務者がその債務の本旨に従った弁済の提供をしたにもかかわらず、債権者がその債務の履行の受領を拒んだり（受領拒絶）、債務の履行の受領が不可能であったり（受領不能）したために、当該債務の履行が遅滞する状況に陥ることをいう。それで、民法第413条は、「債務者はやれるだけのことをやったら、後はもう責任を負わない」といった趣旨のことを規定している。このことから、やれるだけのこととして予め解答を用意させていただいたわけである。つまり、やれるだけのことはやったので、ここから先は受け取る側の問題とさせてもらいたいというわけである。

これから本稿で述べることは、一見すると、私の専門分野とは無関係のように思える。しかし、よくよく考えていただけるとなるほど関連していると理解していただけるのではないかと思います。つ

まり、それほど一見すると関連性がわからない分野なのである。なぜなら、ウルトラマンが登場するからである。

一 メディアを分析すること

1 メディア分析と法

世の中には様々な表現物が存在している。しかし、表現が本当に意図された通り相手に到達しているとは限らない。もし、自己の発信した情報が、伝えたい相手に間違いなく届く（形式的にも実質的にも）のであれば、世の中の争いごとの何割かは起こらないはずである。行き違いや誤解というものは、相手に意図した通りの表現が到達しないことから起こる。そして、世の中の争い事の多くは、この行き違いや誤解から端を発していることが非常に多いのである。

しかし、厄介なことに、表現内容の意図が伝わらないという場合ばかりでなく、伝えない意図で表現する場合もあり得る。つまり、真意を隠して情報の発信をする場合である。となると、世の中には、「表現が表現通り相手に到達する素直な場合」、「表現が表現通りに相手に伝わらない場合」、「表現が表現通りに相手に伝わってはいるが表現者の真意が別にある場合」の3つの場合が想定されるのである。この中で最も単純なのが、「表現が表現通り相手に到達する素直な場合」である。あえて「素直」といれたように、最もわかりやすい表現である。残りの2つの場合、つまり、「表現が表現通りに相手に伝わらない場合」、「表現が表現通りに相手に伝わってはいるが表現者の真意が別にある場合」においては、情報を受け取る側は、後の争いを回避するためには、真の意味を探らなければならなくなるわけである。このような情報の真の意味を探る能力をメディア・リテラシーという¹⁵。現在、我々は高度情報化社会といわれる社会の中で暮らしている。そこでは様々な情報（表現）が飛び交い、その真意を読む能力、メディア・リテラシーが今後ますます不可欠となる。

このようなメディア・リテラシーを身に着けるためには、常に情報の真意がどこにあるのかを考える必要がある。インターネット上の情報が真実かどうか疑うという姿勢は、現在、まあまあ普及していることができるが、報道番組の情報が真実であると信じている人、つまり、報道番組の内容が真実であると信じて疑わない人は非常に多い。しかし、番組というものは、報道番組に限らず、そこに編集という人の手が加えられるため、表現が表現通りのことを意味するとは限らないのである。政治家の発言等は、非常に典型的な例ではないだろうか。前後を繋げば違う意味になるが、前後を切ってしまったせいで正しい意味ではなく、その編集者の意図した通りの意味で報道されてしまう。そのことによって失言ととらえられ失脚した政治家も数多く存在することを我々はよく知っているはずである。

であるから、表現の自由の問題においても、その一部だけで判断するべきではなく、そのときになされた表現全体から総合的に判断する必要があるが生じることとなる。つまり、表現を即、額面通りには受け取らないという姿勢が必要となる。発信者の意図を探る姿勢が必要となるのである。

また、表現というものは表現者が誰であるか、受領者が誰であるかによって、同じ内容がまったく違うものになることがある。さて、ここで思い出していただきたい。私は先ほど法学というものが、どのような学問であると述べたであろうか。法学とは、1つの事象を多面的に見る目が必要となる学問であると述べた。1つの事件は、事実としては確かに1つの事件ではあるけれども、その1つの事件については、被害者の捉え方、加害者の捉え方、目撃者の捉え方、と様々な捉え方がある。ということは、誰の立場でその事実を捉えるかによって伝える情報も異なってくるのである。ゆえに、情報をどのように捉えるべきかを考えるメディア分析と法学的思考とはかなり似た頭の使

い方をするわけである。しかも、私の専門分野は法学の中でも情報を扱う分野であることから、メディア研究はかなり接近領域であるといえることができる。

2 メディア研究と地域の問題

メディア研究と地域の問題についてはいろいろな切り口があるかと思う。しかし、私はあえて地域と異形のものとの関係を考えてみたいと思う。異形のものとは、怨霊や妖怪、怪獣のことだと考えてもらえばいい。我々日本人は、古来、異形のものに対して、様々な思いを込めてきた。つまり、イメージを異形のものに具現化したのである。これを後に紹介する神谷和宏氏は表象という。

このように異形のものに対して表象されたものを解き明かすことは、その地域の文化を読み解くことに他ならない。しかし、このことは軽んじられている傾向がある。というのも、研究対象が、異形のもの、つまり、怨霊や妖怪、怪獣、言い換えれば、非科学的なものであるからである。

非科学的なものは研究に値しない。この傾向は我が国古来のものではない。現在、非科学的なものであっても、当時は科学的なものというものはいくらでもある。例えば、陰陽道は、現在は占いの類に分類されており、非科学的なものとされているが、京都、つまり、平安京はこの陰陽道の理論に基づいて建都されている。つまり、当時はそれこそが科学だったのである。ゆえに、本格的に研究されていた。しかし、今はオカルトのようなものにされている。宗教的なものについてもそうである。つまり、ここでいう科学的というのは、近代的という言葉に置き換えることができる。それでは近代的とはどのようなものをいうのだろうか。

近代的とは近代化されている状態を表すが、私の専門分野である憲法学的にいうと、近代立憲主義が確立している状態をいう。近代立憲主義とは、フランス革命やアメリカ独立戦争から始まる。つまり、レボリューションによって確立された自由主義、民主主義、平等主義¹⁶を標榜する社会のことをいう。憲法学上は、近代化とは、このような社会をいうが、別の面でいうと、近代化とは、魔女狩りや錬金術、魔法との訣別をいう。つまり、近代科学によってその存在が証明されないものは、近代化によって捨て去られたのである。

我が国においては、江戸期に妖怪に対して一大ブームが起こっている。これは現在のゆるキャラブームのようなものであろうか。地域ごとに妖怪がいて、それについて科学的に研究もされていた。怨霊についても、平安期には怨霊信仰¹⁷なるもの確立されており、怨霊封じの手段として陰陽道が科学的に研究されていた。それでは、現在、怨霊や妖怪について科学的に研究されているのであろうか。確かに、研究をしている研究者はいる。しかし、〇〇大学妖怪学部とか●●大学怨霊封じ研究所などというものはない。つまり、近代化の流れの中で廃れていったのである。この原因を作ったのは文明開化の代名詞ともいえる福沢諭吉ではないかと思う。福沢自身が著した『福翁自伝』には、次のような話がある。

「兄さんのように殿様の名の書いてある反故を踏んで悪いと言え、神様の名のある御札を踏んだらどうだろうと思って、人の見ぬ所で御札を踏んでみたところが何ともない。」¹⁸

福沢は、この後、お札を洗手場に持って行ったり、便所に持って行ったり、数年後には、神罰冥罰が大嘘であることを自ら証明するために稲荷神社の社に入り、御神体の石を他の石に代えたりし、次のように結論付けている。

「幼少の時から神様が怖いだの仏様が難有いだのということは一寸ともない。ト筮呪詛一切不信仰で、狐狸が付くというようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。子供ながらも精神はカラリとしたものでした。」¹⁹

つまり、福沢は、狐や狸に憑かれる、つまり、異形のもののみならず、神や仏まで信じていない

のである。これが近代的な姿勢であるというのである。ゆえに、我が国において異形のものが科学的ではないという理由から、軽んじられるようになったのは明治になって、福沢諭吉ら進歩的な思想家の影響を受けたことにその原因があると考えられるのである。

確かに、先述したように、西洋における近代化は、ある意味において魔法や錬金術といったものとの訣別を意味した。ゆえに、急いで西洋に追いつくような近代化を達成するためには、妖怪や化け物といった異形のものと訣別をする必要があったのかもしれない。しかし、我が国において、妖怪や化け物といった異形の存在は、江戸期においては文化であった。近代化の名のもとにそれを軽視する必要は本当にあったのであろうか。今一度再検証をする必要がある。また、西洋は確かに近代化に伴い魔法や錬金術とは訣別をした。しかし、宗教的なものとは訣別をしていない。現在であっても西洋社会の根底にあるのはキリスト教である。しかし、福沢の「反故を踏みお札を踏み」の話は、宗教をも否定してしまったといえる。宗教も非科学的な面は多分にあるが、手本とした西洋では現在でもそれが重く存在しているのに、我が国においてはそれすら非科学的であるという理由から軽んじられているのである²⁰。

3 ウルトラマンを題材とする

私の専門は憲法学である。憲法学とウルトラマン、法学とウルトラシリーズ、何の関連性もなく、単なる趣味、嗜好の範疇だろうと思われるかもしれない。しかし、実は遠くはある関係がある。私の専門分野についてはかなり詳細に述べた。メディア研究というものも私の専門領域にあるということも述べた。そこで、ウルトラマンである。

ウルトラマンには多くの怪獣が登場する。つまり、異形のものである。異形のものには何か別のものが表象されていることも先述した通りである。にもかかわらず、それが軽んじられている、それを軽んじるのが近代的かつ科学的な姿勢だというのが福沢以来の我が国の状況であることも述べた。ということは、ウルトラマンを読み解くことで、怪獣に投影されているものが見えるのではないか。そこに、古来、各地における伝承や文化の類似性が見つけられるのではないか。また、後に述べるがウルトラマンという作品は多面的な見方ができるコンテンツである。つまり、法学的思考で読み解くことができる作品なのである。ゆえに、私とウルトラマンが結びつくのである。

しかし、私は憲法の専門家であり、法律家²¹である。ウルトラマンの専門ではない。そこで、本稿の共著者である神谷和宏氏に登場してもらうことになる。神谷和宏氏は現役の中学校教諭である。日々、中学校で国語教育を行いながら学級担任もされている。神谷氏は中学校の国語科教育にウルトラマンを扱っており、このようなメディア教育の第一人者である。

4 私とウルトラマン、そして神谷氏

ここで、私とウルトラマン、私と神谷氏との関係について触れておきたいと思う。

(1) 私とウルトラマン

ウルトラマンといえばある一定年齢以下のものであれば、子どもの頃にヒーローだったと記憶している人も多いであろう。そう、あくまでもウルトラマンは子どもの頃のヒーローであり、大人のヒーロー（そういうものがいればだが・・・）ではないのである。たいていの子どもは、小学校低学年でウルトラマンを卒業する。恐らく、次に見るのは自分が親になったときかもしれない。それは、ウルトラマン＝子どものものという方程式が成り立っているからである。そしてこの方程式はかなり頑強に私たちの中に根付いてしまっている。

私もこの方程式通りに小学校低学年をもってウルトラマンを卒業した。ウルトラマンは子どものもの。この固定観念から、ウルトラマンが小休止を終え、平成シリーズが始まってまるで他人事

のようにまったく関心がなかった。

ある日、確か大学1年生の土曜日のことだった²²。何となくテレビを見ているとウルトラマンを放送していた。その当時は、『ウルトラマンガイア』(1998年)であったのであるが、赤いウルトラマン(ウルトラマンガイア)と青いウルトラマン(ウルトラマンアグル)がそれぞれ異なった正義観から戦っていた。子どもの頃に見たウルトラマンはたった1人の赤いウルトラマンだったので非常に惹かれた。この2人のウルトラマンがそれぞれの正義を貫くために反目し合い、時には協力し合い戦っていた。それが非常によく描かれていて大学生でも十分に楽しめる内容であった。そこでふと感じたのは、子どもにこの話の真意がわかるのかなということである。例えば、敵の名前は「根源的破壊招来体」というものであったが、文字にしてみると意味は分かるが「コンゲンテキハメツショウライタイ」と音にした場合、大人でもすぐにはわからないものが、子どもにどれだけ正確に意味が伝わるかを感じたものである。この『ウルトラマンガイア』、このようにある意味で本格派のSFの側面を多分に有する作品であった。

そもそもウルトラマンという作品は、戦いへ至るドラマの部分とウルトラマンとなって戦う部分の2つの部分から構成されている。思えば、子どもの頃は後半部分、つまりウルトラマンとなって怪獣や宇宙人と戦う部分に熱中していた。つまり、ドラマの部分についてはおまけのようなものだった。しかし、このときは逆であった。ドラマの部分が主で戦いの部分は従であったのである。つまり、同じ番組であっても子どもの頃と成人した後で、重点を置く部分が異なったわけである。これは『ウルトラマンガイア』が特殊な番組であったからではなく、ウルトラマンシリーズ全体にいえることである。実際、この『ウルトラマンガイア』の後に放送された『ウルトラマンコスモス』、『ウルトラマンネクサス』、『ウルトラマンマックス』、『ウルトラマンメビウス』もそうであったし、『ウルトラマンガイア』以前のウルトラマンについてもそうであることから、このコンテンツには、子ども向けの面と大人向けの面との2面性があると結論付けることができるのである。ウルトラマンシリーズは基本的に子ども向けのコンテンツであることから、特に後者の面について認識されづらい環境にある。しかし、明らかに大人向けの面が存在しているのであり、そこには深いメッセージが含まれている。つまり、表現の真意がそこに隠れているのである。本来、視聴者として想定されている子どもにはわからず、本来想定されていない大人の視聴者だからわかるメッセージが含まれている。ゆえに、メディア研究の素材として、この『ウルトラ』シリーズはふさわしいのである。

(2) 神谷氏との出会い

私と神谷和宏氏との出会いは、5年前に遡る。当時は、まだ母校(明治大学)の助手であった。その頃、メディアの問題に取り組んでいた。その当時、ふと書店で手に取ったのが神谷氏の『ウルトラマンと「正義」の話をしよう』(2011年、朝日新聞出版)だった。当時、マイケル・J. サンドルの『これからの「正義」の話をしよう』(2010年、早川書房)が話題になっていた時期であったので、言葉が悪いがそのパクりもしくはパロディだろうと、ほんの暇つぶし程度に読むつもりで手に取ったのだったが、その内容に驚かされた。ウルトラマンという子ども向けの番組を素材にして、しっかりとその作り手の意図を考察し、正義とは何かといった問題に正面から対峙していた。私は、現在でこそ、正義や信念というものは人の数だけ存在し、特に信念などという言葉は減多に口に出すものではないと思っているが、当時は、「正義の揺らぎ」のようなものを感じていた。その「正義の揺らぎ」について『ウルトラ』シリーズを素材として丁寧に考察されていたのである。それは、まさに、私が大学生の頃、『ウルトラマンガイア』を見たときに感じたものであった。それが見事に表現されていたことに非常に驚かされたことを記憶している。

そこで、神谷氏の他の著書も読みたいと思い、書店を探し回ったが見つからず、直接本人から購入しようとアクセスしたのが氏との関わりの始まりである。その後、当時勤務していた母校での講演を依頼したり、神谷氏の著作に少々関わったりといった関係を細々と今日まで続けている。

2016（平成28）年2月4日、この神谷和宏氏を鳥取大学に招いて講演をしていただくことになった²³。講演のタイトルは『怪獣表象論講義』である。この講義の内容については紙上講義として、今後発表する予定である。今回、鳥取大学で行ってもらった講演の主役は異形のもののうち怪獣といわれるものである。怪獣というとゴジラやガメラが有名であるが、最も多くの怪獣が登場するのは、ウルトラマンをはじめとする『ウルトラ』シリーズであろう。

『ウルトラ』シリーズと聞くと子どものための番組であると軽視する傾向があるが、その作り手は当然大人である。そこには子どもを純粋に楽しませようという意図と、何らかの形でその時代の世相を風刺しようとする試みとメッセージ性を見出すことができる。

このような隠れたメッセージを読み解く能力の養成を日々の教育現場で実践されているのが神谷和宏氏である。今回、神谷氏を鳥取大学に招き、講演をしていただくにあたり、再度、神谷氏どのような問題意識をもって、このような問題に取り組んでいるのかという点を本稿において整理したいと思う。ここからは、ウルトラマン先生こと神谷和宏氏に筆を譲りたいと思う。

二 『ウルトラ』シリーズの概説的研究

ここからは、『ウルトラQ』（1966年）に端を発する、特撮テレビ番組『ウルトラ』シリーズの表象性について考察する。『ウルトラ』シリーズは、2016年現在、誕生からちょうど50年を迎え、その間、20作を超える数多のシリーズ作品と、800本を超える膨大な数のエピソードが公開された。これらの作品内部について、あるいは、作品が現代社会のどのような影響下にあるのか、これを考察していくことには多くの時間と労力が必要となる。そこで、本作自体、あるいは本作を通して、現代社会を読み解く上で必要な基礎的な情報と、研究を進めていく上で、序盤で抱くことになるであろう研究の視座を提出するという意図から、概説的な考察を示したいと思う。本論が示す『ウルトラ』シリーズ研究の視座が、種々なメディアを研究する上で設けるべき視座へと汎化していくことを望むものでもある。

1 ウルトラマンの正義観

2013年の3月9日、明治大学²⁴において大学生、大学院生を主な対象とした『ウルトラマンの思想』を考察する講義²⁵を開催する機会を得た²⁶。

以下は学生に提出してもらったワークシートの回答である。

「『許そうとする心が芽生えても、父親を殺されたという憎しみが消えないんだ』という言葉が印象的だった。その消えない憎しみをどうすればいいのかということが、韓国や中国、北朝鮮と関わっていく上で考えなければならないことだと思う。やはりとことん、話し合わなければ何も始まらないし、解決もしない。互いにわかり合うことなしに、過去の歴史を乗り越えていくことはできない。そして一度武力に訴えてしまうと、マイナスに戻ってしまう。」

その講義で扱ったのは、『帰ってきたウルトラマン』（1970年）第33話「怪獣使いと少年」と、別な脚本家による後日談『ウルトラマンメビウス』（2006年）第32話「怪獣使いの遺産」の2本である。

一般大衆が、罪のない宇宙人を、ただ彼が異形の姿であるということだけで殺してしまうのが前者、殺された宇宙人の子どもが地球を来訪、過去の賠償として地球の割譲を求めるというのが後者

のストーリーだ。

『ウルトラQ』(1966年)に端を発し、『ウルトラマン』(1966年),『ウルトラセブン』(1967年)と続く『ウルトラ』シリーズは、正義の有り様がいかに関動的なものであるかを描いてきた。このことは当時の作り手が一様に戦前生まれであり、「戦中／戦後」という大きな価値観の断絶の折りに、正義や大義が180度転回し、日本が旧来、保ってきた精神性が、西洋的な近代合理主義に駆逐されてゆく世に生きた経験によるものであるのだろう²⁷。

「失われた20年」が過ぎた今日、格差は拡大し、人々を「勝者」と「敗者」に分けた。勝者は強者であり、敗者は弱者となった。弱者の一部はどうにかして悪者を探して、ステレオタイプな「悪者叩き」をして、せめて自らが正義の側にあることを誇示せずにはいられない、つまり「正義の味方ごっこ」を演じ続けるという、閉塞感に満ちた社会となった。

先の学生は、「怪獣使いの〜」2編に示された危うい正義感とその報復に、日韓、日中問題を絡めて説いた。実に的を射たものであろう。自分の信念は即ち社会的正義であると盲信してヘイトスピーチなどに余念がない者は、危うく手軽な「正義の味方」なのだといえる。

『ウルトラ』シリーズで呈された種々の正義をめぐるエピソードは、時代に即した、あるいは時代や場所に関わらず普遍的といえるような、正義に関わる問題を表象するアンソロジーだといえるのではないだろうか。

2 ウルトラマンと戦後

『ウルトラ』シリーズを1966年の放映開始時から順次見ていくと、そこには退役軍人、戦災孤児、靴磨き、万博、(憧憬の的としての)団地…いくつもの昭和の風景が見えてくる。それらは戦前戦中の名残であり、戦後の高度経済成長の印でもある²⁸。憲法学を専門としながら、メディアの問題にも造詣が深く、幾度か共同研究をさせていただいている鳥取大学地域学部佐藤匡講師は初期の『ウルトラ』シリーズについて、次のように語る。

「昭和期のウルトラシリーズは、戦後20年から30年という時期に作品が作られているため、戦争の影というものが色濃く残っている。それは、作品の主な視聴者である子どもたちが戦争を知らない世代であったとしても、その保護者、作品の作り手、作品の出演者の多くが戦争経験者であったことから生じる特徴であった。このように作品に関わる人たちの多くが生の戦争、生の軍隊を知っていたからこそ、そこに登場する部隊は非常にリアルな組織として描かれている。昭和期のウルトラシリーズは、このように戦争体験という暗い影を引きずってはいるが、高度経済成長を成し遂げた時代に作られている。つまり、戦争という『負』の部分(『影』の部分)と高度経済成長という『正』の部分(『光』の部分)が渾然一体となっている作品なのである。それが非常にテーマ性のあるドラマを生み出したり、純粋に子ども向けのコメディタッチのドラマを生み出したりしている。暗い戦争という『過去』を引きずりつつ、高度経済成長まっただ中でこの発展して行く『現在』を守るために戦う光の戦士、それが昭和期のウルトラマンであった。」

なるほど、生活や文化の欧米化、経済の成長が戦後、「正」の価値を得て、「光」となる中で、少し前まで「正」であったはずの戦前的価値観は、「負」となり「影」となっていた、そう考えれば、リゾート開発を邪魔するかのように現れた怪獣ウーや、無人島に生息していた怪獣レッドキングが、人類に立ちをはかる悪と見なされ、葬られていったことにも合点がいく。でも、本当にその行為が正義なのか。そもそも、彼らは本当に悪なのか。高度経済成長期を遠い昔に終えた世に生きる私たちに、『ウルトラ』シリーズは多くの問題提起を残した。

「戦前（戦中）／戦後」における価値観の断層は深い。そこで犠牲になった人々、声なき声を上げ続けた人々がいたことは想像に難くない。先の怪獣たちは、けたたましくも悲哀を帯びたその咆吼で、私たちにそんなことを告げているかのようで、どこか切ない。

3 ウルトラマンと包摂

『ウルトラマン』の有名なストーリーの1つに「怪獣墓場」（第35話）がある。

ウルトラマンとともに地球防衛の任に就く、科学特捜隊の隊員たちが宇宙をパトロール中、怪獣墓場を通る。そこは、これまで倒された怪獣たちが永遠の眠りに就く、彼らの墓場なのである。隊員たちは、自分たちが多くの怪獣を倒してきたことに思いを寄せる。そこで、地球に戻った後、怪獣たちの供養を執り行うのである。さらに、ハヤタ隊員もウルトラマンに変身し、様々な思いを胸に天を仰ぐのだった。ウルトラマンや科学特捜隊は、主題歌の中でこそ「怪獣退治の専門家」と謳われるが、彼らが殺しのプロなどではなく、やむを得ず、害獣を駆除するかのごとく、怪獣を退治してきたということは「心ならずも（怪獣を）葬った」という、この回のナレーションからも知ることができる²⁹。

実際、『ウルトラ』シリーズでは、多くの怪獣が倒されなかった。

（初代）ウルトラマンは、交通事故死した子どもの魂が憑依したヒドラが天に昇るのを見届け、少年が書いた落書きが具現化してしまった怪獣、ガヴァドン宇宙に連れていった。ウルトラマンジャックは、産卵のために船を襲った夫婦怪獣を海に返したし、ウルトラマンタロウは、悪意のない海亀怪獣を宇宙に住まわせた。ウルトラマン80は、親子げんかの果てに地球に来てしまった怪獣母子に対し、母親ばかりをわざと手加減して攻撃することで、母を守りたいという息子の孝行心を引き出し、宇宙へ帰っていくのを見守った。

怪獣を人類の脅威と設定し、それを倒すことでカタルシスを得るというのが、『ゴジラ』以降に構築された「怪獣映画の文法」である。怪獣が脅威として存在せず、最後に倒される必要がなければ、人間たちが人事を尽くすことも、また、ウルトラマンが存在することも必要なくなる。しかし、『ウルトラ』シリーズでは、この種の展開が描かれることは珍しいことではなかった。

『ウルトラマンコスモス』は、2001年7月に放送開始され、2ヵ月後に9.11のテロが勃発した。（アメリカに敵対する国を除き）世界中が、テロリスト根絶という一義的な正義に目覚めた。悪い奴は悪い奴であり、1人残らず探し出し、国際社会（アメリカ社会）のルール下で裁きをつけろ、という信念に駆られた。しかし、そんな空気が漂う中でウルトラマンコスモスは、悪者探しや怪獣退治ではなく、最後の最後まで包摂を目指した。怪獣は倒すべく標的ではなく、包摂すべき、異形の弱者であると定義づけた。そして、己の秩序を立場の異なる他者に強いる、偏狭な正義こそが悪であり、敵であるとした³⁰。さらには最終回、そのような観念の具現化であるカオスヘッダーという存在とさえ、解り合うことで作品は締めくくられた。他者を悪と見なし、それを倒すのではなく、他者と協調し、共存を目指すという希望あふれるラストであった。

『ウルトラセブン』でデビューした、脚本家の市川森一は2006年、筑紫哲也との対談³¹の中で、「『ウルトラ』シリーズには）怪獣を徹底的に倒せ、という意識は希薄ですね」という筑紫哲也の問いに対して肯き、「平和のためには許すことしかない」と語った。

世界の出来事は、何もかも許せることばかりではない。断罪しなくてはならない悪もある。卑劣な絶対悪もある。だが、集団ヒステリーに陥り、立場の違うものを見つけ出しては悪と見なし、己の不満や日本の不幸の原因を「あいつらのせいだ」と声高に糾弾する行為が見られる今日、弱者の包摂、他者との共存を目指す姿に正義を見出すウルトラマンから感じることは少なくない。

ウルトラマンができなかったこともある。

『ウルトラマンタロウ』第11話「血を吸う花は少女の精」は、親に捨てられた少女、カナエの物語である。

彼女の里親はカナエに愛情を注ごうとしない。能面のように無表情なカナエは、出会う人たちに花を手渡す。しかし、その花は死んだ捨て子の眠る、「捨て子塚」に咲く吸血植物であった。やがて吸血植物は怪獣バサラとなって出現するも、ウルトラマンタロウに倒される。人々は口々に、「子どもを捨てる母親が悪い。」「いや男こそ悪い。」「子を捨てたくて、捨てる親はいない。悪いのは社会だ。」という。

ウルトラマンタロウは怪獣を倒せても、遺児、子どもを遺棄する親を救うことはできず、そんな親を生み出す社会を良くすることはできないのだった。

包摂は、英雄に委ねることではなく、私たち1人1人が取り組むべき課題であるということを無言のうちに示しているかのようである。

4 芸術としてのウルトラマン

ウルトラマンから「正義」、「戦後」、「包摂」について考えてきたが、本作が優れた娯楽作品として半世紀にわたり消費され続けてきたことのひとつに芸術性の高さがある。というのも、本作は、優れた美術、カメラワーク、音楽等が駆使された総合文芸であるといえるからだ。

ウルトラマンやウルトラセブン、そして初期の多くの怪獣、宇宙人をデザインした彫刻家の成田亨は、ウルトラマンと怪獣(宇宙人)を「コスモス(秩序)/カオス(混沌)」の具象と位置づけた³²。先にも述べたように、初期の作品内部には、戦後に台頭した近代合理主義が、前近代的な(あるいは戦前、戦中の)事象を排斥する様が描かれている。その際、多数派の人間やその人間の進歩に与するウルトラマンをコスモスの象徴、そしてそこに対峙する(させられる)怪獣をカオスの象徴とし、可視化させたのは成田の芸術哲学によるものであった。

20世紀美術の特徴の1つに、本来、目に見えない人間の無意識の具象化が上げられるという³³。成田が怪獣を混沌の具現とした結果、高度経済成長期の日本社会が古い価値観を「暗」と位置づけ、そこに目を背けて発展し続けることで、人々が半ば無意識に内包することになった、後ろめたさや、寂しさという集合的無意識を怪獣は表象することになったといえるだろう。

成田の前衛的な美術に加えて、そのカメラワークもきわめて前衛的であった³⁴。

『ウルトラマン』第23話「故郷は地球」では、まぶしいばかりのライトを敢えて逆光に位置し、その手前に主要なキャラクターを配置している。彼らの表情は何も見えず、シルエットとライトによってのみ、このシーンは構成される。画面には光と影しか映らない。

後の作品になるが、『帰ってきたウルトラマン』第34話「許されざるいのち」では、自分をさげすみ続けた亡父への妄執にとりつかれるまま、異常な生物研究を続ける男の内面を表現するのかなようなシーンが描かれているなど、シリーズを通し、多くの場面で印象的なカットが入る。

これらの視覚的な芸術性に加えて、クラシックやジャズ様のBGMが演出を引き立てるなど、音楽面も相まって³⁵、作品内部のテーマ性や、登場人物の心情を表現するための効果を大いに盛り上げたことは、本作が長年、多くの視聴者を引き付けてきたことを考える上で重要な点であるだろう。

おわりに

以上のように、『ウルトラ』シリーズは単なる怪獣退治の子ども向け番組ではない。様々なものを含んだ総合複合メディアである。つまり、子ども番組という表現手法を取りながら、その表現の対

象が大人である場合と子どもである場合とでその意味も内容も大きく異なるのである。ゆえに、興味深いし、メディア研究の対象としても意義があるのである。

2月4日に神谷氏を鳥取大学に招いて講演をお願いしたことは先述した通りである。テーマは神谷氏の自由に任せたが、神谷氏は鳥取大学地域学部 of 学生に講演するのであるからと、テーマを「怪獣表象論講義－『ウルトラマン』シリーズから戦後日本を『読む』と「1960年代に書かれた2本の作品。『ウルトラQ』『富士山SOS』と『ウルトラマン』『まぼろしの雪山』を『都市化』『発展』をキーワードに読み解く」としてもらった。

異形のもはその時代の何かを具現化したものである。それを神谷氏は表象という。様々な学問には歴史が絡んでくる。ということは、異形のものが何を表象していたかの理解は、物事の本質をつかむうえで重要な要素となってくる。しかし、我々は、福沢以来の近代的かつ科学的なものの見方から、このような前近代的で非科学的なものを軽視してきたのではないだろうか。神谷氏の研究は、このことを我々に気づかせてくれるし、学生たちがこのような考えに触れることは非常に有益であると考ええる。なぜなら、異形のものが表象しているものは、少数者や弱者の場合が多いからである。そのものをそのまま見るよりも、何かに投影された事象を見る方が心に残るということはある。ゆえに、このような研究を軽んじるべきではなく、自身の研究及び教育に役立てるべきではないかと深く感じている次第である。

【参考文献】

- ・ 佐藤 匡「動物殺処分根絶に向けての地域における取り組み－動物行政の現状と自治体の取り組みについて－」『地域学論集【第11巻第3号】』（2015年，鳥取大学地域学部）
- ・ 佐藤 匡「住基ネットとプライバシー－マイナンバーに向けて－」『地域学論集【第12巻第1号】』（2015年，鳥取大学地域学部）
- ・ 佐藤 匡「インターネットメディアについての考察－法学的視点とメディア論的視点の学際的研究－」『地域学論集【第12巻第2号】』（2015年，鳥取大学地域学部）
- ・ 野上 修市 = 佐藤 匡『解説 日本国憲法』（2015年，東京教学社）
- ・ 神谷 和宏『3分あれば世界は変わる』（2015年，内外出版社）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマン「正義の哲学」』（2015年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマンは現代日本を救えるか』（2012年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマンと「正義」の話をしよう』（2011年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『M78星雲より愛をこめて』（2003年，文芸社）

【注】

- 1 学問を人文科学と自然科学とに分類し、社会科学を人文科学に内包させる分類方法もあるが、本稿では、学問を社会科学、自然科学、人文科学の3つに分類する方法を採用している。
- 2 これに政治学を加える分類方法もある。ゆえに、法学部政治学科というものが存在する。
- 3 共通教育科目（1年次設定）。2015（平成27）年度までは「日本国憲法」であったが、2016（平成28）年度より「憲法学」へ改称。
- 4 地域学部科目（1年次設定）。統治機構とは憲法の一部のことであり、日本国憲法上は第4章以下の部分
が統治機構に該当する（場合によって第1章も含むことがある）。共通教育科目で「憲法学」学んだ後にこの「統治機構論」を学ぶことによって憲法を立体的に学ぶことができる。
- 5 地域学部科目（3年次設定）。
- 6 この表現の自由と通信の秘密の複合領域であるインターネットメディアについては、佐藤 匡「インターネットメディアについての考察—法学的視点とメディア論的視点の学際的研究—」『地域学論集【第12巻第2号】』（2015年、鳥取大学地域学部）において述べた。
- 7 新しい人権にはプライバシー権や環境権、肖像権といった権利があるため、逆に広範囲になってしまうのである。なお、最近では何でもかんでも人権としたい風潮があるが、人権とは保障されるものであり、保障されるからにはそれなりの価値が必要となる。基準としては、その権利がその人の人格的生存にどれほどの影響を与えるかということになる。例えば、喫煙権 VS 嫌煙権という対立がある。喫煙という行動に対する姿勢の問題であるので、単なる嗜好の問題である。ゆえに、人格的生存というまでいえないので憲法上保障される人権ではないとされる。しかし、喫煙権はそうであっても嫌煙権は果たしてそうであろうか。伏流県
の健康への影響が問題視される現在においては、喫煙を嫌がるというのは単なる嗜好の問題ではなく、自らの健康を護るといった人格的生存にかかわる権利ではないだろうか。また、学問の自由等の既存の権利についても自己流の解釈をし、それを声高に叫ぶ傾向があるが、単なる好き嫌いの問題ではなく、それが保証されないとその人が生きていけないというほどの人格的生存に影響するからこそ保障されるのであって、そうではないただの快、不快の問題を人権問題とすることは、逆に本当に護らなければならない人権の価値を低下させることにもなり得ないため、気を付けるべきであろう。
- 8 表現といった場合には他者を想定する必要がある。先述したように、他者の表現の自由の行使によって、ある者のプライバシーは侵害される。プライバシーとは秘匿したいまたは秘匿しなければならない情報のことをいう。もし、ある者が、他者のプライバシーにかかわる情報を紙に書いて、誰にも見られないうちにその紙を燃やしたとしたら、プライバシーを侵害したことになるであろうか。ゆえに、表現とは他者に影響を与えるような情報の発信をいう。他者を想定しない単なる情報の発信はもはや表現ではなく表出であり、表現の自由の補償範囲には入らない。しかし、思想及び両親の自由の補償範囲には含まれ得る。
- 9 このような情報のことを、私は「コミュニケーション型情報」と呼んでいる。このコミュニケーション型の情報は、その基盤を憲法上の表現の自由に置いている。ゆえに、法の介入は必要最低限でなければならない、法が必要以上に介入すれば、それは表現の自由への侵害となる。
- 10 このような情報のことを、私は「ストック型情報」と呼んでいる。このストック型の情報は、その情報の内容が常に正確であることを要求されるため、その情報の正確性の維持を目的として、法の積極介入が許されることとなる。というのも、このような情報が不正確であると、人の生命や財産に対して多大なる影響を及ぼし得るからである。
- 11 個人情報については、住民基本台帳ネットワークに関係させて、佐藤 匡「住基ネットとプライバシー—マイナンバーに向けて—」『地域学論集【第12巻第1号】』（2015年、鳥取大学地域学部）において述べた。
- 12 動物の個体識別情報については、その管理の問題点を、佐藤 匡「動物殺処分根絶に向けての地域における取り組み—動物行政の現状と自治体の取組みについて—」『地域学論集【第11巻第3号】』（2015年、鳥取大学地域学部）において述べた。
- 13 住所という情報は単なる個人情報である。しかし、もしその人がドメスティック・バイオレンスやストーカーの被害者であれば、その人の住所は単なる個人情報ではなくプライバシー情報ということになる。なお、本稿ではこれ以上追求しないが、個人情報ともいえないような噂の類を個人情報といたり、単なる個人情報をプライバシーといたりする場合が多すぎる傾向がある。ひどいものになると、単なるうわさ程度の情報をプライバシーだと騒ぎ立てる場合もある。これは恐らく個人情報やプライバシーに対する理解不足が招く大きな弊害であり、社会全体が個人情報「過」保護社会となっているのではないだろうか。個人の生命（広く健康）や財産に関する情報がプライバシー、個人を特定するような管理されている情報が個人情報、噂等の信憑性のない情報を取るに足らない情報ととりあえず理解しておけばいい。間違っても取るに足らない情報をプライバシーと誤解して大騒ぎしないように気を付けたい。このような情報の分類については、また機

会を見つけてに発表したいと考えている。なお、個人情報「過」保護社会という言葉については、青柳武彦『個人情報「過」保護が日本を破壊する』（2006年、ソフトバンククリエイティブ）を参考とし、拝借した。

- 14 このような情報に基づいて地域社会への参加することが可能になったり、福祉関係の給付が受けられるようになったりすることになることから、ストック型の情報は地域社会について不可欠な要素となる。また、そもそも各種表現は人が人であるために行うものである。これを専門的にいうと、表現の自由には自己実現の価値と自己統治の価値があるといわれるが、コミュニケーション型の情報はそもそも人であるために不可欠な要素となるので、結果として、ストック型であろうがコミュニケーション型であろうが、情報というのは地域にとって不可欠な要素となるのである。
- 15 このメディア・リテラシーとコンピュータ・リテラシーとを混同している場合が最近多くみられる。メディア・リテラシーとは、本稿で述べているように、発信された情報の真意を読み解く能力のことをいう。これに対し、コンピュータ・リテラシーとは、情報端末を使いこなす能力をいう。このように両者の意味するところはまったく異なるのである。
- 16 ここでいう平等主義とは、国民がみな平等という意味ではない。政府が国民に対して平等に接するということである。最も平等に接するためには、政府が国民にかかわらないことである。もし、国民を平等にするために誰かに手を差し伸べれば、政府がその者に対して最悪したことになるからである。ゆえに、極力国民と関わらないということが、国民を平等に扱うということになる。であるから、自由主義経済（私的自治）が発達することになるのである。
- 17 怨霊信仰の史料上の初見は、桓武天皇による早良皇太子（崇道天皇）の鎮魂に現れている。これは、あくまでも史料上であって、天皇の鎮魂がこのように大々的に行われていることから、この当時までにある程度怨霊信仰が我が国に定着しているのではないと思われる。怨霊信仰については、井沢元彦の『逆説の日本史』シリーズが詳しい。また、以下に述べる福沢諭吉をはじめとする近代的科学研究の姿勢についても本稿と同様の批判を加えている。詳細については、井沢元彦『逆説の日本史1 古代黎明編』（1998年、小学館）を参照。
- 18 福沢諭吉著・富田正文校訂『新訂 福翁自伝』（1987年、岩波書店）25頁及び26頁より引用。
- 19 福沢注18前掲書26頁及び27頁より引用。
- 20 西洋の近代化は宗教なしには成立し得なかった。もう少し具体的にいうとキリスト教なしには成立し得なかったのである。近代立憲主義の3要素は自由主義、民主主義（当時は共和主義といった方が正しい）、平等主義であるが、そもそも平等概念は、神の前では人は皆平等であるということに由来する。つまり、現実には王や貴族、平民と身分の差が存在しても、偉大な神の前では人は小さな存在に過ぎないことから平等であるとの考えに辿り着くのである。しかし、我が国はキリスト教のような一神教の国ではない。また、福沢によって科学的ではないものは軽んじる傾向があったため、近代立憲主義は成し得ないこととなる。しかし、この福沢の宗教軽視のおかげで皮肉にも近代化は進むことになる。というのは、既存の宗教の力が弱まったことにより、新しい宗教の入り込むすきのようなものが醸成されたからである。つまり、天皇である。絶対多岐な神の存在するキリスト教の存在によって近代立憲主義は担保される。キリスト教国ではない我が国が近代化を成し遂げるのにキリスト教の国教化政策を採ったのでは時間がかかり過ぎ、西洋列強に植民地とされる。そこで、天皇を絶対的な神の子孫とし、現人神とすることによって、西洋におけるキリスト教と同様の意味を持たせることによって近代立憲主義を達成させるのである。これを成し遂げたのは大日本帝国憲法であり、まさに、これを起草した伊藤博文及び井上毅のおかげで、我が国はキリスト教国以外で初めて近代化に成功することができたのである。
- 21 憲法学を専門としている者を法律家と呼ぶのは本来的にはおかしい。というのも、憲法と法律とは別物だからである。一番顕著な違いは、向いている方向が違うということである。法律は国民の行動を縛る対国民規範であるが、憲法はその法律（その法律を作る国家）を縛る対国家規範である。ゆえに、「憲法という法律は・・・」と言っている人がいたら、その人は大きな間違いを犯していることとなる。
- 22 私は大学に2回入学をしているため、正確に言えば2回目の大学1年生の時ということになる。
- 23 本講演は、鳥取大学地域学部地域政策学科佐藤ゼミナールのExtension Programとして企画された。佐藤ゼミナールは、卒業研究のためのCore Program、法的思考力を要請するSub Program、そして、広く教養を身に付けるExtension Programの3つのプログラムから構成され、週3コマでゼミナール活動が行われている。この週3回制は、担当教員である私の発案ではなく、学生からの申し出により実施している。ゆえに、私の側から週1回制に戻すことはできない。但し、Extension Programの内容については、私に決定権があるため、今回の神谷氏の講演会の実現の運びとなった。
- 24 佐藤の当時の所属及び職名は、明治大学助手であったことから、本講義の開催場所が明治大学駿河台キャンパスとなった。

- 25 この講義とは別内容ではあるが、同様のコンセプトに基づいた講義を2016年2月4日に佐藤及び地域学部地域政策学科佐藤ゼミナール主催で開催した。地域学部の学生のみならず、工学部・農学部の学生、教員、職員と多くの参加者を得た。この講義の内容については次号以降にて発表を予定している。
- 26 この講義の詳細は、神谷 和宏『ウルトラマン「正義の哲学」』(2015年、朝日新聞出版)を参照。
- 27 『ウルトラ』シリーズに内包された正義のあり方に関わる諸問題については、神谷注26前掲書を参照。
- 28 『ウルトラ』シリーズが戦後日本社会の変遷をどう描いてきたかについては、神谷 和宏『ウルトラマンは現代日本を救えるか』(2012年、朝日新聞出版)を参照。
- 29 『ウルトラマン』第35話「怪獣墓場」の脚本家は、佐々木守である。佐々木のこのような怪獣への思いについては、切通理作『怪獣使いと少年ーウルトラマンの作家たちー【増補新装版】』(2015年、洋泉社)を参照。
- 30 もっとも、『ウルトラマンコスモス』の「怪獣包摂」の観念は、ここで急に明示されたものではない。前作の『ウルトラマンガイア』(1998～1999年)でも主題歌では「愛さえ知らずに育ったモンスター 叫びはお前の涙なのか」と、怪獣を同情すべき環境下におかれて育ったものととらえる概念が見られる。この考え方は、テロリストによる日本人殺害時の新聞報道で、ISのテロリストを「親の愛情や、教育を受けずに育った”モンスター”」などと表現したことと重ねて考えることができ、今後の考察の余地がある。
- 31 「特集・ヒーローが見た日本」『筑紫哲也 NEWS23』(2006年、TBS)での筑紫哲也との対談。
- 32 成田亨『特撮と怪獣ーわが造形美術ー』(1995年、フィルムアート社)において成田自身が述べている。
- 33 諸川春樹『西洋絵画史入門』(1998年、美術出版社)128頁参照。
- 34 樋口尚文『テレビヒーローの創造』(1993年、筑摩書房)200頁以下参照。
- 35 『ウルトラ』シリーズの音楽性については、以前よりサウンドトラックのライナーノーツや、『検証 第2次ウルトラブーム〜』(1999年～2001年、辰巳出版)シリーズ等で述べられてきたが、現在に至るまで、総括的に一書にまとめた研究は見当たらない。『ウルトラセブン』の音楽性に限定して言及したものとしては、青山通『ウルトラセブンが「音楽」を教えてくれた』(2013年、アルテスパブリッシング)がある。

(2016年1月29日受付, 2016年2月3日受理)